

紀 要 委 員 会

委員長 薄井 明
委員 神田 直樹 早出 春美
佐藤 園美 志水 朱
櫻井 潤

編 集 後 記

今年も、12月20日の発行日に無事『看護福祉学部紀要』を刊行することができました。投稿して下さった先生方には、改めて感謝申し上げます。また、紀要委員の皆さまには、懸案事項の解決にご尽力いただき、ありがとうございました。

今年2018年は、9月初旬に台風21号の襲来、胆振東部地震の発生、その後の全道ブラックアウトと、北海道が立て続けに大きな災害に遭った年として、おそらく忘れられない年になるでしょう。そして、この2018年発行の本号をもって、『看護福祉学部紀要』は25年、四半世紀の歴史を刻むことになります。

『看護福祉学部紀要』のバックナンバーは第11号（2004年）から北海道医療大学学術リポジトリで閲覧可能ですが、その表紙を見るだけでも歳月の経過を実感します。他大学でご活躍なさっている先生方、定年退職された先生方、本学部で現在指導的な立場にある先生方のお名前がみえます。実は、私もこの第11号に「〈日本近代礼法〉の形成過程(2)」という研究報告を投稿しておりまして、「あのときはこんな研究をしていたんだ」と、当時の記憶が蘇りました。創刊の第1号は、さらにその10年前の1994年ですから、本紀要には「歴史」といえる重みを感じます。

と同時に、表紙をはじめ、当時の紀要から変わったところも少なくありません。この点でも歳月の経過を感じます。「原著論文」という分類はだいぶ前にやめました。昨年第24号から「研究業績リスト」の掲載をやめました。こうした措置や改善は今後も何度か必要になるでしょう。私は『看護福祉学部紀要』の第50号（2043年刊行予定）を見届けることはできませんが、それにつながる第30号までは関われると思っています。これまで諸先輩方が築き上げてきた本紀要の伝統のよい部分を守りつつ、変えるべきものは変えて「本学部の教員の研究発表の場」としてよりよいものにしていく。こうした紀要委員会の任務を、『看護福祉学部紀要』にとって節目になる年の暮れに、再認識しているところです。

（薄井 明）